

札幌市環境プラザ運営協議会 令和6年度第2回 実施概要

1. 日 時 令和7年2月26日(水) 18:30~20:00
2. 会 場 札幌市環境プラザ 展示コーナー内
3. 出席者
 - (1) 委 員：安東 義乃 委員(合同会社エゾリンク)
大沼 進 委員(北海道大学文学研究院)
岡崎 朱実 委員(環境コンソーシアムえこらぼ)
橋本 結 委員(北大森林研究会)*公募委員
吉田 卓矢 委員(札幌市教育委員会教育課程担当課)
五十嵐 健二 委員(札幌エルプラザ公共4施設 館長)
 - (2) 札幌市：環境政策課環境教育担当係長、環境政策課推進係 係員
 - (3) 事務局：高坂 美江(市民活動担当課長)
上杉 直洋(札幌市環境プラザ)
榊 瞭太(札幌市環境プラザ)

4. 会議次第

- (1) 開会
- (2) あいさつ 札幌市環境局 環境都市推進部 環境政策課長 飯岡 慶崇 様
(環境政策課環境教育担当係長 代読)
- (3) 運営協議会について
- (4) 委員 自己紹介
- (5) 議事
 - ・運営および施設利用状況について(令和6年度報告)
 - ・令和7年度事業計画について
 - ・意見交換「こどもエコクラブ札幌事務局としての役割強化に向けて」
- (6) あいさつ 札幌エルプラザ公共4施設館長 五十嵐 健二
- (7) 閉会

5. 議事概要

- ・令和6年度事業報告および令和7年度の計画
事務局から令和6年度の報告および令和7年度事業計画について説明した。

質疑応答

- (委 員) 体裁について、事業報告書と計画書において比較して見られるように、共通した番号が振られていた方がいい気がする。
講座・研修についても、一般向けのものとは指導者向けのもので、分けて記載いただいた方が、何をしているのか分かる気がする。
- (事務局) ご意見を参考に、次回の掲載方法について考えたいと思う。

- (委員) うまく見せる方法について、他の委員はご存じないか。
- (委員) No.1は環境プラザとしてやる常設企画コーナーの展示の更新で、No.16は広くいろいろな方々に使ってもらう事業だが、共催・協力事業も別途あり、そこの違いもうまく表現しなければならない。確かに言葉尻が似ていると重複しているのではないかと、取られかねないと思う。
- (事務局) 今お話にあったとおり、似通った事業と見えてくるときには、事業の色分けを工夫したいと話を聞いて考えた。また、事業計画書はこの方向で進んでいるため、変えることは難しいが、報告のときに工夫してお伝えしたいと思う。
- (委員) 報告書ではアからエまで振っているとされたが、これは役所のように。情報の収集、提供は仕方がないと思うが、環境保全、交流の支援などは「つなぐ」、他の団体の活動を「支える」など、多少長くていいので、そうするとよいかもしいない。
- (事務局) アからウは指定管理業務としていただいている仕様書に基づいて表記しており、その中から番号振りをしている枠組みで事業を実施している。
先ほどの共催・協力事業と展示コーナーの活用は被っているという話をいただいたが、展示コーナーの活用で言うと、これからプログラムを実施したい団体、あるいは、自分たちで企画を立て、どこかでというほどではない団体に施設を使ってもらい、実施してもらっている背景がある。共催・協力事業は、ひとり立ちではないが、各々で実施しているところに広報や会場の手配で協力しているものとして、現状の線引きがある。
- (委員) 施設の役割として「学ぶ」、「つなぐ」、「支える」の三つがあり、「これは『学ぶ』です。これは『学ぶ、つなぐ、支える』です。これは『支える』です」というものが入るとうまく表現できるかなと思った。

・意見交換「こどもエコクラブ札幌事務局としての役割強化に向けて」

環境プラザが担っているこどもエコクラブの札幌事務局の役割として、今後、新規でリーチしていく施設や団体、またそのアプローチ方法について、各委員と意見交換を行った

- (委員) こどもエコクラブは、環境省の事業だったが、事業仕分けからなくなり、日本環境協会が引き取り、いろいろなところから寄附を集めながら運営している状況。環境プラザが事務局を運営することになったのは、環境省の時代から事務局を札幌市がやっていたため、そのまま来たのかと思う。

最初の頃は、小学校の教員で熱心な方がこどもエコクラブをつくり、活動していたが、その教員が異動したらなかなか続かないということもあり、先ほど言ったとおり、事業仕分けでぐっと減って、このようになっている。

全国のどこにどれくらいあるかを見たが、北海道はすごく減っている。他

では増えているところもある。どちらかというと、サポーターがたくさんいるところではなく、家族でやっているところが割と多く、そういう中でどういところにアプローチしていくか、今の状況からはなかなか難しい。

昔は、こういう活動をするところはあまりなかったが、今はアウトドアなどの体験ができるところもある。そういうものに参加できる中で大人も関わって子どもがやることはなかなか大変で、そういうものをやりませんかと声かけするのは環境プラザとして大変になるのではないかと思う。

また、環境プラザがこどもエコクラブをあそエコ団のような感じでやるというとき、事務局だから、下支えのところがプレーヤーとして出ていき、事務局としての活動にどう還元していくのかと思った。そこで得たものを交流会としていろいろな面白いことをやっていらっしゃるということできているのかなと思うが、他の団体はそこまでのマンパワーもお金もない中でやっており、すごく差があり、どう声をかけて進めていくのが課題。交流して、お互いに気づき合うことはいいことで、できたらいいと思うが、果たして今の環境プラザで対応できるのか。

(事務局) 皆さんのご意見も伺いたいと思うが、おっしゃるとおりかと思う。あそエコ団は施設側が出向いて行って事業をするということで、自分たちが提供する側の事業の話をしており、ギャップがあるのは承知している。

また、振り返って考えたとき、コロナで活動する団体がすごく減ってしまった背景として、あそエコ団の活動を促進することに重点を置いた時期があったと思っている。本来は、事務局側に回ることがすごく重要かと考えている。だからこそ、あそエコ団の活動よりも、こどもエコクラブの事務局的な仕事が環境プラザとして軸足を置くべきものだと思う。ただし、この線引きが難しく、こちらが勝手に思っているだけかもしれないし、分岐点的なところだと思っている。

活動する団体が増えれば、そこに力点を置き、施設の仕事も増え、自分たちが出向く事業をどうするかという判断もあるかなと思うが、今年度は(新規登録が)1件だったということを考えると、何かアプローチの仕方を考える機会としていいのかと思い、今回、意見交換させていただきたいと思った。

(委員) 私にも小学校と中学校の子どもがいるが、こどもエコクラブというのは聞いたことがなかった。子どもは児童会館に入っており、いろいろな活動に飢えている。職員のサポートはすごくしっかりとしており、そうした活動との関係、大人が関わるのが難しいということで、職員がミニ児童会館のクラブ活動として一緒にできるといいのかと考えた。そうすると、小学校も取り込んでという流れになるのかなと思う。

また、同じクラブということで考えると、中学校の息子が化学クラブに入っているが、やることがマンネリ化し、同じことをやっている。子どもも飽きているので、新しい取組として、クラブ活動に提案するといいのかなと思

う。

子ども主体というより、教えられる人を増やす、また活動に関わる大人を増やすことがいいのかと思った。

(委員) 今回の議題の趣旨に合っているかは分からないが、活動団体の発足に向けた支援とあります。一番上に書いてあるちょボラエコクラブは継続登録年数23年とあり、結構長いと思う。ということは、初めの頃に活動していた子どもたちは既に大人になっているわけです。その方たちが、エコクラブで経験したことで心に残っていることがあれば、別の場所でエコクラブにつながるようなことをしているかもしれないと思う。

以前までエコクラブにいて、高校生までしかいられないのだったら、その方たちは今どんなことをしているのか、また、今後、エコクラブと一緒にできることがあると考えているのではないかと思う。だから、本当に新しい人たちを巻き込むのもいいと思うが、今までエコクラブに関わっていた人をもう一度巻き込むのもいいのではないかと考えた。

(事務局) 北区のあいの里の児童会館がしているものがちょボラエコクラブ。また、今のお話のとおり、既存の団体にどういう経緯で発足したかをヒアリングしてみるのも一つの手かと思う。

また、新たにというのは難しいかもしれないが、うまくできると相乗的に上げていけるのではないかと思い、軸足を置いてみる可能性もあるのかということ。

(委員) 学校もそうですが、児童会館も職員が替わると興味が薄くなることもあり、そうなるとう終わってしまう。そんな中、職員がやりたいと思ったら子どもたちもやりたいという時、地域の方を講師として招き、例えば、人形劇の講習会があり、それに参加してもらえる地域の方を探して、職員が替わっても、地域の方が講師としていることで、いつまでも活動が続けられるのだという話をしてきた。

(委員) 多分知っていると思うが、環境プラザのこどもエコクラブでずっとやっていた子たちが『あそびバ!』のようなイベントでゲームを提供する手伝いをするがあった。つまり、卒業して終わりではなく、次の年はお手伝いをする側に回るという繋がりがあったかと思うので、過去のものを探してみたらいいと思う。

(委員) 現状のこどもエコクラブはどこに向けて周知されているのか、引っかかっている。そして、エコクラブに参加することのメリットとは。先ほど、活動を振り返って、交流し、いろいろなことを知れるという話はあったが、入るのはハードルが高く、自分たちにやりたいことが既にあり、向上させたいと思い、振り返って、より高みを目指すと思うが、入り口がそこなのは

なかなか難しいと思う。

先ほど子どもたちがごみ拾いから始めるという話をしたのは、地域をきれいにしようというところからスタートし、自分たちのできることは何かと、考えていく。振り返って、それを高めようというより、まずはやってみようということだと思う。そのため、エコクラブに入ることのよさやメリット、ニーズにどう応えてくれるのかがどう伝わっているのかは吟味しなければいけないと思う。

また、環境プラザの活動計画を見ると、様々なイベントがあり、その他にも情報を手に入れようと思えば、インターネットなどでもできる。ある意味、情報はあり、いろいろな取組に主体的に参加できる状況の中、こどもエコクラブに所属し、活動するメリットがどうかということ。

つまりは、時代が移り変わっていく中での現状のニーズ、子どもたちにどう応えていくかを大きく見直さなければいけないかと感じた。

(事務局) この点もすごく難しく、熱量のある子どもや大人がいると、広がっていくと思うが、子ども発信で何かしてみたいという時、何をしたらいいのかというサポーターになる方たちにヒットするとつながっていくのかなという気がする。エコクラブの事務局機能として、参加証を提供でき、活動レポートを作成すると事務局からコメントをもらえるなど、活動意欲の向上につなげていけるところもあると思っている。また、全国の活動が実際に見られるので、それが活動のヒントになり、次はこんなことをしてみようというものはきっとあるはずだが、おっしゃるとおり、メリットが分かりづらいというのはそのとおりにかなと思う

その上で伺えればと思うが、指導者の人手不足があると思う。今までこういう環境活動をしていたが、人が足りなくて難しいということが現場にあるのではないかと感じる。それは実際にはどうなのか、お話をいただき、また、我々にどんなことができそうか、ヒントをいただけるとありがたい。

(委員) 指導者不足ということについてだが、学校の学習なり活動なりを支える分には、教員がいるので、そこで賄えるかと思う。だから、指導者不足というより、学ぶ機会の充実が今の学校現場だけで支えるものではなくなってきていると感じる。当然、学習内容は学校で賄えるが、プラスして学びたいとなったときの場だと思う。それは今まで教員がやってきたところだが、それを教員がやるのがなかなか苦しくなっているし、そこに時間をかけられる方もいなくなり、それを支える大人がいて、子どもたちが学びたい環境が別にある状況がとてもすてきだと思う。子どもを支えるのは、学校だけではなく、地域もというのが理想で、そういう機会があるとすてきだなと思う。

児童会館もそうだが、学校でも職員が替わると変わってしまう。だからこそ、残したいものは地域でつくっておくことがすごく大事ななと思う。先ほどのコミュニティスクールの話とも関わってくるが、学校は変わってしまうので、変わらずに残したいものは地域で育てる、変わらずに育てたい子ども

の姿は地域でという仕組みをつくらなければ根づかず、時代が変われば地域も変わってしまい、子どもが地域から離れていくという状況だと持続可能な社会をつくるという点では苦しいかなと思う。

(事務局) 参考にさせていただきます。

(委員) 今のお話のとおり、メリットが必要だということ。直接のメリットではないが、例えば、温暖化対策をしようというとき、食品ロスに気をつけよう、海をきれいにしようということであるのだが、それがどうして温暖化対策に繋がるのか、そのメカニズムというか、仕組みを知らないままやっていると、短期の興味にしかならない。長期の興味に繋がるためには、根本的な理解を積み重ねていかないとそうならないので、その根本的な理解を支えられるような仕組み、教育のシステムがあるといいと思う。

(委員) こどもエコクラブの事務局を環境プラザでやっているということだが、環境プラザとして事務局をやる意義やメリットがどのくらいあるのか。

例えば、登録者数、メンバー数、活動数に応じて補助金が入るという大事なメリットがあるのか、そういうものはないが、ボランティア精神で、全国組織として、札幌の組織を潰すわけにはいかないというメンツや思いからやろうとしているのかは大きいと思う。

登録する側から見たとき、どういう人たちが登録してくれたらいいのか、聞いていて分からなかった。いただいたものを見ると、1人や2人で活動している本当に小さなグループをターゲットにしている。そういう人たちをたくさん集めたいのか。子どもが思い立ってごみ拾いを始めた、そういう子たちを応援するということなのか、あるいは、児童会館、小・中学校、科学部、地域など、既に存在しているユニットを拡充したいのか、それによって取るべき対策が違ってくると思う。そこをどうするといいいのかが分からないと、こういうものはどうかという議論がしにくいので、それを教えて欲しい。

(事務局) 活動してくれる団体が増えると、環境プラザの講師のリーダー派遣の事業が活用され、貸出物品も増えると思う。あるいは、見学に来る子どもたちが増えると、施設も活性化するという狙いがある。

次に、ターゲットについては、あまりにも小規模なところを狙って進めるのは効率性を欠くと思っている。官公庁が所管する施設が実施していくこと、また既に活動団体としての規模感を持っているところがさらなる充実を図るために登録してもらいたいと考える。

(委員) 最近の令和5年や令和6年の1人や2人というのはどういうふうに入ってきたのか。先ほどは円山動物園で発表をしたという話だったが、それがうれしいから継続しているという話なのか。また、既存の組織をターゲットとすると、こういう少人数で実施しているグループがどうなってしまうのか、どう考えたらよいだろうか。

(事務局) 確かに、こういった交流会の活動も大所帯のところばかりになってしまうと、交流の面では薄まるというのはそのとおりかなと思うし、おっしゃるとおり、方針の矛盾みたいなものを感じた。

(委員) 例えば、1人、2人、3人でやっている小さなグループは、地域で活動している児童会館なりクラブなり、ある程度大きな団体に繋ぎ、そちらに橋渡しをして、そちらの活動を環境プラザとして補助するという網の目のつくり方はあるとは思う。人が替わっても地域で回るような仕組みにする、それをこどもエコクラブの事務局として使っていくという環境プラザ側の戦略的意義。お金をもらえるわけではないのであれば、環境プラザの事業としてかこつけて、数字で見えないところの活性化に使うという見通しや戦略を持ち、こどもエコクラブはその道具だと割り切る、つまり、エコクラブをどうするというより、エコクラブをだしに使うというほうが今の話を聞くと懸命な戦略だと聞こえた

(事務局) 札幌の事務局業務は札幌市から指定管理の一環として受けているということもあり、波及効果を狙ってということもあるが、新規団体が1件、しかも、小規模な団体だとなっており、そこを広げていきたいということもあって、今回、お話をさせていただいた。

(委員) 登録者に交流会のご案内をしていると思うが、それで参加したのはどこか。

(事務局) 3団体あり、駒岡小学校のエコクラブ、あべファミリーと環境プラザのあそエコ団。

(委員) 人数が少ないところは家族でということか。

(事務局) 家族や友人関係で集まって活動しているところが多い印象。

(委員) 活動内容や、はじめた経緯は聞いているのか。

(事務局) そこまでは手がけていなかったもので、取り組んでみたいと思う。

(委員) エコクラブまでは難しいが、児童会館にも、こんなことをやりませんかと話して取り組んでみる。また、そういうものを提案してみる。それがエコクラブになるかは別として、そういう取組をお知らせして、フィードバックすることでもいい。ただ、それではエコクラブにはならないということは考えています。

(事務局) 我々の運営する施設の横の繋がりも検討してみたいと思う。

(委員) 過去に創設したクラブが現状動いているのかが気になる。月日が経っても、組織が生きていれば動いているかもしれない。ただ、登録はしたけれども、更新されていないところもあるのかなと思う。そうになると、子どもたちを集めて、持続的に関わっていききたいという大人をキャッチしなければいけないと思う。結果、子どもたちが入ろうと思っても、組織立っていないと難しく、そういう大人をキャッチすることが重要だということ。それが地域に根づいたり、組織が持続可能になったりする仕組みかと思う。

以上